



多くの参拝客が詰めかけた節分会の豆まき

願満

復刊第二十六号

2016年 3月

身延別院発行

〒103-0001

東京都中央区

日本橋小伝馬町3-2

Tel 03-3661-3996

Fax 03-3663-2766

節分会追儺式

老若男女二百人 にぎわう境内

身延別院の節分会と星祭りが二月三日に行われました。節分の日に毎年行われている恒例行事で、年男・年女の檀信徒さんが「除災得幸(じよさいとつこう) 福は内」と言いながら、本堂から境内の参詣者に向かって、福豆や福銭を勢いよくまきました。

本来、節分とは二十四節気の気候が移り変わる「立春、立夏、立秋、立冬の前日」のことを言いますが、春を迎えることは新年を迎えることと同じくらい大切な節目であったため、次第に春のみに用いられるようになりました。室町時代の頃から節分といえば立春の前日のみを指すようになりました。

季節の変わり目には邪気が入りやすいとされており、節分は、疫病などをもたらす悪い鬼を追い払う中国の習俗に由来しています。奈良時代に日本に伝わり、宮中行事として追儺(ついな)という厄払いの行事が行われるようになりました。その行事の一つ、豆打ちの名残りが「豆まき」になったとされています。

当院ではこの日、午後一時から本堂で節分会追儺式が営まれ、檀信徒さん約二百人が一年の幸福と社会の安穩を願ってご祈祷を受けました。今年の節分会は平日にあたり、天候にも恵まれ、午後一時五十分の豆まきの時刻までには、近隣の会社のOLやサラリーマン、保育園の園児さんや老人ホームの方々など、老若男女問わず、たくさんの方々が境内に詰めかけ、にぎやかに豆まきが行われました。今回も豆だけではなく、前回好評だった袋入りのインスタントラーメンやお菓子、タオルなどもまかれ、大いに盛り上がりました。

御首題を いただく旅

第二十六回 山梨県富士川町・妙諸寺

リニア通過結縁の寺



妙諸寺本堂

東京・品川駅で中央新幹線リニアモーターカーの新駅建設が先頃、着工しました。リニアモーターカーは、時速六〇三キロの世界最高速度記録を持つ、まさに夢の超特急。JR東海は品川―名古屋間の二〇二七年開業を目指しています。品川

―名古屋を四十分、品川―大阪を六十七分で結ぶというのですから、本当に驚きです。

さて、なぜ、突然にリニアの話を始めなのか、疑問に思った方も多いでしょう。実は、先日、千か寺参りで訪れたお寺で、とても珍しい御首題をいただきました。お題目の左側に「中央新幹線リニア通過結縁之寺」と書かれていたのです。

私は思わず「『リニア通過結縁』とは、どういうことなのか」とご住職にうかがってしまいました。ご住職は「実は、境内の真上をリニアの高架線が通過していくのです。高架線の高さは二十〜三十メートルと言いますから、相当高い場所を走っていくようです。リニアの建設ルートはほとんどがトンネルと言われ、地上部はわずかと聞いていたので、このお寺の真上を通過すると聞いて、本当に驚きました。それで、これもご縁なのかと『リニア通過結縁之寺』と御首題に添えることにしたのです」と話してくれました。昨年、工事関係者がお寺を訪ねてきて、高架線の位置を示す杭を打っていったそうで、ご住職はその場所を教えてくださいました。

私は、千七百か寺以上のお寺で御首題をいただいています。カタカナ表記の言葉が混じる御首題はごくまれです。しかもそれが、科学技術の最先端を意味する「リニア」という言葉でしたから驚いてしまいました。実際のお寺はというと、本堂の前に大きな広場があり、鉄棒などの遊具や桜並木もあって小学校の校庭のような趣です。私が訪れたときは、たくさん子どもたちが本堂を

平成二十八年一月二日新春参詣之砌
此経甚深微妙如說修行
南無妙法蓮華經
諸經中第一
リニア中央新幹線通過結縁之寺
妙諸寺
徳長

出入りし、広場で鬼ごっこをするなどして遊んでいました。本当にのどかな風景です。

日蓮宗寺院大鑑によると「開基の道玄院日正は当所に庵を結び、法華経を誦誦し、真言宗徒の折伏を初め、次々と改宗させていった。開山の顕性坊日宝は東小林村全戸を法華経信者となし、庵を改め寺観を一新。天正五年(一五七七年)に日宝が示寂しているので、開創はその少し前と思われる」とあり、戦国時代までお寺の歴史がさかのぼることが分かります。また、広場(境内)の入り口に日蓮宗寺院には珍しい禅宗様建築の四脚門(しきやくもん、山門)が建っています。その様子から見て、室町時代までさかのぼりそうな文化財クラスの建物です。

このようにお寺は長い歴史があつて、古き良き時代ののどかな風景を今に伝えていきます。一方で、十一年後にはお寺の真上を世界最速・最新のリニアモーターカーが走り抜けます。古きものと新しいものの取り合わせ。そのバランス。境内がどんな風景に変わっていくのか、私はお寺の将来がとても気になってしまいました。

(平山徹・新聞記者)

副住職が全国日蓮宗青年会第三十二代会長に

就任を前に
インタビュー



身延別院の藤井教祥副住職が全国日蓮宗青年会(全日青)の第三十二代会長となることになりました。これまでも当院の諸行事で住職を支え、当院青年会活動の要となって奔走してきた副住職ですが、青年会の全国組織のトップとして日本中を駆け回ることになります。会長の任期は五月十七日からの二年間。就任を目前にした副住職に抱負をうかがいました。(聞き手・平山徹)

——副住職が全日青の会長を引き受けるに至ったいきさつはどのようなものだったのでしょうか、まずはその点からお話いただけますか？

副住職「全日青には会長の下に十三〜十五の担当委員会が置かれており、それぞれ社会活動だったり、復興支援活動、布教活動をしています。私はその中の一つ、『社会教化担当委員長』として、現在の第三十一代会長の下で、活動を繰り広げてきました。その任期が終わりに近づいたことから、東京・池上の日蓮宗宗務院で今年一月二十八日、全国日蓮宗青

年代表者会議が開かれ、次期執行部案が討議されました。この中で現会長から、次期会長として私が指名を受け、全国各地域の代表者たちの承認を得たのです」

——身延別院にも青年会はありませんが、そもそも全日青とは何を行う組織のですか。どんな人たちが集まっているのですか。

副住職「身延別院は『東京東部』という管区に入っています。こうした管区が全国に七十四あり、そ

の管区ごとに青年僧によって約六十の青年会が組織されています。全日青は、全国の管区の青年会をさらに八ブロックに分け、ブロックの代表者が集まり、会長、副会長、担当の委員会委員長などを選出して構成します。全国の青年会の活動を支援したり取りまとめたりするなどして牽引する組織と言っよいでしょう。全国で約千人の青年僧が参加しています。青年僧と言っても年齢の上限は様々で、四五歳だったり五十歳だったり。管区によって様々です。いずれにしても昭和三十七年に初代会長が第一回目の全国結集(集会)を開催して以来、連続と活動を続けています」

——どんな全日青にしていきたいですか、今から考えていることはありますか？

副住職「先ほども言いましたように、この二年間、今期の全日青の社会教化担当委員長として、また自分自身が設立した一般社団法人日青塾の理事として、一般の人々を巻き込みながら僧侶の活動をアピールしてきました。怪談語り、精進料理をいただくイベント、被災地復興支援活動、東京マラソン・大阪マラソンへの参加といった活動の数々です。そんなこともあって、全国の青年僧の中で『藤井教祥が会長になったら、彼のことだ、これまでにやったことのない事業に取り組むのでは!』と期待されていると思うのです。だから、青年僧侶でなければできない、思い切った事業を企画し、即、実行していかうと考えています」

(左ページへ続く)

青年僧自身が考え実行する組織を目指す

副住職の最近の活動から



青年僧と慰霊行脚（沖縄・糸満市）



精進料理をいただくイベント（東京・銀座）



子どもたちと食育活動
（東京・勝どき）



被災地で傾聴活動
（福島・南相馬市）

——「即、実行」というのは素晴らしいですね。実際には困難なこともあるのでしょうか？

副住職「私は今、三十六歳。全日青の会長としては異例の若さのようです。ですから、私よりも年上の副会長や担当委員長も多く、『若いくせに』とか『生意気だ』と思われることもあるかもしれませんが。しかし、発足当初の全日青は今以上に若手の僧侶が多く、もっと活発に活動していたと聞いています。ものわかりの良い、おとなしい存在であってはいけないと思うのです。無難にまとめるだけの調整型の組織でよしとするなら、私がかつての副会長や担当委員長も、私が会長になる意味はありません。青年僧自らが考えて決めたことを、実行していく。年長者からストッパーがかかったとしても、実行していく。そのくらいアグレッシブに挑戦していく組織を目指してい

きたいと思っています」

——これまで以上に全国各地を駆け回ることになり、身延別院を離れる機会が増えそうです。別院の檀信徒さんにひと言お願いします。

副住職「確かに全国を駆け回ることになります。全国八ブロックの催しや担当委員会のイベントなどがあれば、会長としてあいさつにうかがうことになるからです。国内ばかりではなく、海外の行事にも出かけることになるでしょう。米国シアトル開教百周年、インド・ナグプール龍宮寺法要など、十三回忌、インド・ナグプール龍宮寺法要など、すでに決まっているものもあります。しかし、私がかつての副住職が実行しているのは、すべて檀信徒の皆さんの支えがあるからです。そのことを一瞬たり

とも忘れたことはありません。また、全日青の会長になったからといって、身延別院の行事や青年会イベントが減ることもありません。夏休み子ども道場、べつたら市への参加、縁結びコンなどはこれからも続けたいと考えています。私の姿を見かけたら、どうぞ、これまで同様に声をかけてください。相談にも乗ります。檀信徒の皆さんあつての私だからです。

——全日青の会長として、これから二年間、存分に力を発揮してください。檀信徒の私たちも副住職の活躍を注目し続けたいと思います。本日はありがとうございました。

副住職「ありがとうございました」

寺の動き

新年祈禱会に二百五十人



新年祈禱会で撰経を受ける参拝者たち

正月三ヶ日、「願満高祖日蓮大菩薩」御開帳
新春祈禱会が厳修されました。身延別院の新年
最初の行事です。大晦日の境内は町内の参詣者
が多く訪れ、ご祈禱は元日午前八時頃から始ま
りました。

三日間で訪れた参詣者は約二百五十人にのぼ
りました。ご祈禱を終えると、藤井住職から参
詣者一人一人にお屠蘇が振る舞われ、祈願木
札、曆、葛菓子が授与されました。

中山法華経寺、堀之内妙法寺などを団参

身延別院の檀信徒の一行が一月十一日、千葉
県市川市の大本山・中山法華経寺と総武霊園、
東京都杉並区の本山・堀之内妙法寺を参拝しま
した。参加したのは藤井住職、藤井教祥副住職
をはじめ、檀信徒さんから計三十五人。一行は八
時四十五分にマイクロバスで当院を出発しまし
た。

最初に訪れた法華経寺では、荒行堂の行僧を
見舞う各地からの参拝客で混雑する中、ご祈禱
を受けました。続いて市川市の総武霊園を訪
れ、身延別院開山で身延山久遠寺第七十三世法
主の文明院日薩上人と、身延別院初代住職で身



中山法華経寺を参拝し、本院の前で記念撮影

延山久遠寺第八十六世法主の藤井日静上人のお
墓参りをしました。

最後に訪れた妙法寺では、祖師堂でお開帳を
受け、諸堂を案内していただきました。

昨年引き続き新年写経会

身延別院青年会主催の新年写経会が一月十七
日、当院で開かれました。昨年に続き、誰にで
も気軽に佛寺に足を運んでもらおうと青年会が
企画したものです。

檀信徒さんのほか、今回お寺を初めて訪れる
という方もおり、十三人が参加しました。地下
ホールに机と椅子が用意され、参加者は、藤井
教祥副住職から写経の心構えなどの説明を受け
た後、妙法蓮華経如来壽量品第十六のお自我偈
の五百十文字を、面相筆を使って一つ一つ丁寧
になぞっていきました。



真剣に写経に取り組む参加者たち

豆入れ奉仕に十二人

身延別院の檀信徒有志が、一月二十二、二十三日、節分会で用いる豆の袋詰めを地下ホールで行いました。身延別院では、まかれた豆を参詣者が持ち帰れるように、小さなビニール袋に詰めています。今年は六斗五升分の豆が用意されました。参加者は、豆を杯で袋に入れる役、袋をホチキスで閉じる役など、役割を分担しながら手際よく作業を進めていました。事前に準備にご協力いただいたおかげで、節分会を二月三日に盛大に行うことができました。

豆入れ奉仕にご協力いただいたのは以下の皆さんです。

阿久津喜美子、石渡日出子、伊東精子、今井善子、小林聰子、酒匂三千子、佐竹美智子、寺



節分の豆まき用の豆を袋詰めする檀信徒の皆さん

久保トシ子、中田しずえ、林好江、山口彌恵、吉田陽子、龍憲吾(敬称略)。
ありがとうございました。

栃木・妙建寺の一行が当院を団参



当院を団参に訪れた妙建寺の皆さん

栃木県小山市の妙建寺(住職・西口玄修上人)の檀信徒の皆さん九人が一月二十日、当院を参拝されました。妙建寺は建武元年(一三三四年)の創建で、日蓮聖人の六人のお弟子さんの一人、伊予阿闍梨(いよあじやり)日頂上人を開山と仰ぐ名刹です。

住職の西口上人が大学生だった時、当院で隨身をされていたご縁があります。その後も西口上人は当院をたびたび訪れられています。

一行はこの日午前十時過ぎに当院に到着しました。本堂で願満日蓮大菩薩のお開帳を受け、

地下ホールで休憩した後、当院を後にされました。

今後の予定

三月十七日(木)〜二十三日(水) 春季彼岸会
二十三日(水) 彼岸会施餓鬼法要

午後一時より

四月 一日(金) 願満祖師御開帳

八日(金) 花まつり 終日甘茶供養

十二日(火) 甲子大黒天祭

編集後記

願満二十六号をお届けします。今回は四―五面で、当院の副住職インタビューを大きく特集しました。全国組織である全国日蓮宗青年会の第三十二代会長に、藤井教祥副住職が就任するというニュースが飛び込んできたからです。正式な就任は今年の五月からのことと、就任後はとても忙しい立場となりそうです。

しかし、副住職は「身延別院の檀信徒の皆さんの支えがあつてこそ」と強調されました。

健康に留意され、存分に力を発揮してもらいたいと願っております。

次回はお盆過ぎの発行を予定しています。

(平山)

靈山八ヶ年

あれや
これや

日蓮大聖人の有名な御文章の『波木井殿御書』に次のようなくだりがある。「釈迦仏は天竺靈山に居して八箇年法華經を説せ給。御入滅は靈山より良に当れる東天竺俱尸那城跋提河の純陀が家に居して入滅なりしかども、八箇年法華經を説せ給山なればとて御墓をば靈山に建させ給き。されば日蓮も如是、身延山より良に当て、武蔵国池上右衛門大夫宗長が家にして可死候可。縦いづくにて死候とも、九箇年の間心安く法華經を讀誦し奉候山なれば、墓をば身延山に立させ給へ。未來際までも心は身延山に可住候。」

この御書は偽撰説はあるものの、釈尊は靈鷲山で八年間、『法華經』説法をされたので、その墓を靈鷲山に建てさせたということだが、日蓮も身延山で九ヶ年の間『法華經』を讀誦したので、どこで死のうとも墓を身延山に建ててほしい、という大聖人のお言葉が書かれている。本稿では文中の釈尊の靈鷲山八ヶ年の『法華經』説法について検討してみたい。

釈尊は八十歳で入滅されたというのが諸種の仏伝の一致するところだから、八十入滅は動かせない。すると『法華經』説法の開始は釈尊七十二歳の時となる。ところで、『法華經』の開經とされる『無量義經』には「四十余年、未顕真実」(四十余年、未だ真実を顕さず)とあり、『妙法蓮華經』從地涌出品第十四には「得成阿耨多羅三藐三菩提。從是已來始過四十餘年。」(阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまえり。是れより已來始めて四十余年を過ぎたり)とある。つまり、釈尊が悟られてから『法華經』説法までに最低でも四十年は経っているということである。ということは、釈尊の『法華經』説法が八年だから、菩提樹下で悟られた時の年齢は三十二歳以下となる。私たちが今日、普通に知っている釈尊の伝記では、二十九歳出家、苦行六年、そして三十五歳の成道であるが、これでは三十五歳に最低でも四十年を足し、さらに

八年を足すと八十三歳となってしまい、計算が合わなくなる。ここで大聖人の他の御文章を見てみると、釈尊の事績について大聖人は諸処に「十九出家、三十成道」とされていることが分かる。

たとえば、大聖人三十七歳の時の『一代聖教大意』には、「仏は十九出家、三十成道と定むる事は大論に見えたり。一代聖教五十年と申す事は涅槃經に見えたり。法華經已前四十二年と申す事は無量義經に見えたり。法華經八箇年と申す事は涅槃經の五十年の文と無量義經の四十二年の文の間を勘うれば八箇年なり。已上、十九出家、三十成道、五十年の転法輪、八十八入滅と定むべし。」(原漢文)とある。「仏は十九出家、三十成道と定むる事は大論に見えたり。」とあって、その典拠は大論、すなわち『大智度論』にあるとのことである。そこで同論の『大正藏經』テキストを検索してみると、「十九出家」はあるものの、「三十成道」は見つけることができなかった。

また、「法華經已前四十二年と申す事は無量義經に見えたり。」とあるものの、実際には『無量義經』には「四十余年」であって、「四十二年」とは確定していない。実はこれを「四十二年」とはつきりと確定しているのは、大聖人の三十三歳の時の著述とされる『問答鈔』の中の引用文である。同書に、

「問云、四十二年は方便を説、後八ヶ年は法華經を説せ給ふと申す証文は何れに見えて候ぞや。答云、大論云、十九出家三十成仏と云云。涅槃經云、八十入滅。三十より八十までは五十年なり。然るに法界性論云、仏年七十二歳説法華經云云。是たしかなる証文也。」

とある。これによると『法界性論』という論書に釈尊は七十二歳で『法華經』を説かれたとある。この論書は六世紀にインドから中国へやってきた訳経僧菩提流支の撰述という。この書は現存しないが、中国天台智顛の頃には存在した。『法華玄義』や『法華文句』など、あちこちに引用文が残っており、日本でも円珍以来、叡山にはあったようである。源信の著作『真如觀』中にも引用がある。青木隆氏の論文によると、釈尊が成道後の四十二年に『法華經』を説いたとする説の淵源がこの論書に求められるという。

今日、仏典などの電子データ化が進み、短時間で色々なことが検索できるようになった。本稿もそのおかげを蒙っている。(住職)